

ロンドンにおける1990年代から2000年代にかけての具象絵画の展覧会史——「トライアンプ・オブ・ペインティング」展について

梶田倫広

1. はじめに

1990年代初頭、ゴールドスミス・カレッジの卒業生であるダミアン・ハースト(1965-)ら、大学を卒業したばかりの若手作家たち、いわゆる YBAs(Young British Artists)がロンドンのアート・シーンを席卷した。ハーストたちは、自らが企画した1988年の伝説的な「フリーズ(Freeze)」展で華々しくデビューした。広告代理店サーチ・アンド・サーチの創業者で、著名なアート・コレクターであったチャールズ・サーチが彼らの作品を買い、また1985年に開館した自身のギャラリーにおいて、1992年より「ヤング・ブリティッシュ・アーティストズ」と題した一連の展覧会を行い、若い作家たちを支えていった。1997年にはロンドンの王立芸術院にて「センセーション——サーチ・コレクションによるヤング・ブリティッシュ・アーティストズ」展が開催される。おりしもトニー・ブレア首相が提唱したクール・ブリタニアという文化輸出政策においても、YBAsは新しいイギリス文化のアイコンのひとつとなった¹⁾。

YBAs 世代の作家たちが、大型でセンセーショナルなインスタレーションを手がけていったことは、同時代の若い作家たちに多くの影響を与えた。ハーストよりも6歳年長だが、1990年にチェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザインの修士課程を卒業したピーター・ドイグ(1959-)は、後年、次のように述べている。

当時、わたしの同世代のあいだには競争がありました。しかしある意味では、外で起こっていることについて遅れてもいました。たとえば、その年のあいだにダミアン・ハーストやマイケル・ランディといったアーティスト集団が現れたからです。すべての学生がこのことを知っていました。わたしの学年のかなり多くの学生が自らの実践をすっかり変えて、ある意味で、いま言ったようなタイプの作品の芸術制作と接点を持つようになりました²⁾。

具象絵画、いわば形式という点では従来の芸術表現の枠組において作品を制作するドイグもまた、1990年代前半に台頭してきた作家のひとりである。ドイグは、当時、YBAsの作家たちがつくるコンセプト重視のインスタレーションのカウンターとみなされていたし、本人もそれを自覚していた³⁾。YBAsの躍進のコインの裏表のように、実は新しい具象絵画の傾向がロンドンのアート・シーンに脈々と息づいていたのだ。ところでハース

トもドイグも、それぞれ別の観点から20世紀後半のイギリスを代表する作家フランシス・ベーコン(1909-1992)との関連を看取できる点は興味深い。ハーストは、ベーコンが自身の芸術的キャリアに与えた影響についてたびたび公言している⁴⁾。一方、ドイグは、写真を参照源に絵画を描くという制作スタイルにおいて、同様の手法を採用するベーコンとのつながりを読み取ることができる。

1990年代とは、ベーコンの制作過程の解明という点でも、ターニング・ポイントになった時代である。1992年に亡くなったベーコンのスタジオ、およびそこに残された数多の資料は、1998年、ダブリン市立ヒュー・レーン美術館に寄贈され、2001年に一般公開されるに至った。これに並行し、ベーコンの特異な制作スタイルが明らかになっていった。今でこそ写真をもとに絵画を描くことは当たり前のことだが、ベーコンが活躍していた時代ではそれ自体がまだ一般的ではなかった。ベーコンのアトリエには雑誌の切り抜きや写真などが膨大に残されており、また、それらには作品制作の過程で繰り返し参照されていた痕跡が色濃く見られる。20世紀という映像の世紀の時代を反映したかのようなイメージの貯蔵庫としてのスタジオで、ベーコンは絵画を制作していた。このことは、その後の画家たちの課題をも予兆していたと言えるかもしれない。

2. 1990年代から2000年代にかけてロンドンの主要美術館で開催された絵画展について

20世紀から21世紀にかけての世紀転換期に、ロンドンの主要美術館で開催された絵画の展覧会をまとめた(表1)。すると、新旧のイギリスの具象絵画の作家たちが交錯するさまが見えてくる。フランシス・ベーコンの展覧会(ヘイワード・ギャラリー、1998; テート・ギャラリー、1999; テート・ブリテン、2008)のほかに、ロンドン派と呼ばれる主に具象絵画の作家たち(1990年代に60~70歳を迎えた作家たち)の回顧展、あるいは新作展が1990年代初頭から2000年代初頭にかけて盛んに行われている。たとえば、ルシアン・フロイド(1922-2011、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、1993; テート・ギャラリー、1998)、レオン・コゾフ(1926-2019、テート・ギャラリー、1996)、マイケル・アンドリュース(1928-1995、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、1991; テート・ブリテン、2001)、フランク・アウエルバッハ(1931-、王立芸術院、2001)、ハワード・ホジキン(1932-2017、テート・ブリテン、2006)、R. B. キタイ(1932-2007、テート・ギャラリー、1994; テート・ギャラリー、1998)、デヴィッド・ホックニー(1937-、テート・ギャラリー、1991)などである。

こうした顕彰、回顧の展覧会がひと段落すると、1990年代半ばより、ずっと若い世代の作家(1990年代を20代~30代で過ごした作家たち)の個展が、中規模の美術館で開催され始め、2000年後半よりテートなどの大規模美術館で開催されるようになる。たとえば、フィオナ・レイ(1963-、ICA、1993)、ピーター・ドイグ(ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、1998; テート・ブリテン、2008)、クリス・オフィリ(1968-、サーペンタイン・ギャラリー、1998; テート・ギャラリー、2010)、ギャリー・ヒューム(1962-、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、2000)、イアン・キアー(1971-、テート・ブリテン、

2003)、ハーヴィン・アンダーソン(1965-、テート・ブリテン、2009)などが挙げられよう。イギリスの作家ではないが、マルレーネ・デュマス(1953-、テート・ギャラリー、1996; カムデン・アート・センター、2000)、ラウル・デ・カイザー(1930-2012、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、2004)、リュック・タイマンズ(1958-、テート・モダン、2004)、ロンドンで学を修め、現在はロサンゼルスを拠点に活動する、ドイツ出身のシルケ・オットー＝ナップ(1970-、テート・ブリテン、2005)、マンマ・アンダーソン(1962-、カムデン・アート・センター、2007)などの展覧会も目を引く。また、絵画の新しい動向を扱ったグループショーとしては、「アンバウンド(Unbound)」、「トライアンフ・オブ・ペインティング(Triumph of Painting)」、モダン・ライフをキーワードに、20世紀後半の西欧の絵画動向を整理した「ペインティング・オブ・モダン・ライフ(Painting of Modern Life)」などが重要な展覧会として位置づけられるだろう。同展のカタログでは、出品作家たちの写真や映像に対するコメントが収録されている。

3. 「トライアンフ・オブ・ペインティング」展について

さて、本稿では「トライアンフ・オブ・ペインティング」展(以下、「絵画の勝利」展と表記)および、この展覧会で実は中心的役割を担ったドイツ人作家、マルティン・キッペンベルガーに焦点を当てる。「絵画の勝利」展は、2005年、サーチ・ギャラリーで3会期にわたって開催された。先述したように、1990年代、サーチはYBAsの作家たちの活動を支えていた。しかしながら、サーチはその筆頭格であるダミアン・ハーストと次第に疎遠になり、また2004年には作品を保管していた倉庫が火災に遭い、YBAsの代表的作家であるチャップマン兄弟の代表作などが失われた。「絵画の勝利」展は、こうした出来事の翌年に行われた一連の展覧会である。不幸に見舞われたサーチ・コレクションの再出発としての機会だったわけだが、一方であたかもYBAsから決別し、そのカウンターにあった絵画に乗り換えたとも捉えられかねないこの転換は、ロンドンのアートシーンに衝撃を与えた。すなわち批評的にも美術市場においても、転換点と捉えられる展覧会である。ただし、この転換の大きさについては、すなわち、この展覧会における批評的、あるいは市場的影響力については、いまだコロナ禍のため、一時資料の調査のために現地を訪ねられないこともあって、なかなか考察を進めることができなかった。したがって本稿では、この展覧会のカタログのなかに言及されていることを通じて考察を進める。

「絵画の勝利」展は、2005年から2006年にかけて3期に分かれて催された。それぞれの会期と作家は(表2)の通りである。ただし、展示された作家とカタログに掲載された作家には若干ずれがあるかもしれない。サーチ・ギャラリーのウェブサイトによれば、同展覧会の第二期にダーク・スクレバーの作品が展示されていることになっているが、カタログには掲載されていない⁵⁾。本稿における出品作家の目録は、ひとまずはカタログに掲載された作家にもとづく。

このカタログに掲載された総勢57名(アーティスト・ユニットも、それぞれ1名と換算)は、主に北西ヨーロッパおよびアメリカ合衆国出身、あるいは在住の作家である。イギリス(イングランド、スコットランド、ウェールズを含む)生まれの作家は15名(26.3%)、

2005年当時、イギリス在住の作家は25名(43.9%、うち、ロンドン在住は23名)。他の地域としてはドイツ生まれおよび在住の作家の数が突出している。ドイツ生まれの作家は15名(26.3%)、在住の作家は14名(24.6%)である。アメリカ合衆国出身の作家は7名(12.3%)、在住作家は8名(14.0%)。すなわち全体の80%以上が、イギリス、ドイツ、アメリカを拠点に活動している作家たちである。東欧出身かつ在住作家は、ポーランド出身・在住のウィルヘルム・サスナル、ただ一人。名古屋出身・在住の杉戸洋は、アジア地域からの唯一の選出である。最年長の作家はヘルマン・ニツチュ(当時67歳)で、最年少の作家はヘルナン・パス(当時27歳)。出品作家の平均年齢(物故作家も2005年時点で存命だった場合の年齢を計上)は、37.5歳である。若手から中堅に差し掛かる作家たちを主体に構成されると言えそうだ。平均年齢以上(1967年以前の生まれ)におけるドイツ出身の作家は10名。これは、このカタログに取り上げられた1968年以前に生まれた全作家の37.5%にあたる。すなわちこの展覧会は、ある程度スタイルの確立しているドイツ人作家たちを紹介するという色彩も強かったことがわかる。

4. 現代絵画の参照源としてのマルティン・キッペンベルガー

このように「絵画の勝利」展に取り上げられた多くの作家は、ドイツ出身、あるいはドイツを拠点としていた。そのなかにあつてやはり、当時、唯一の物故作家であるマルティン・キッペンベルガーの異質性が際立つ。事実、カタログには、まず冒頭にアリソン・M. ジンジャラスによる「キッペンベルジアナ(Kippenbergiana)」と題された、キッペンベルガーについての小文が掲載されている。

マルティン・キッペンベルガーについて簡単に紹介しよう。キッペンベルガーは、1953年、ドイツのドルトムントに生まれた。1972年、ハンブルクのアート・アカデミーに入学するもすぐに退学し、俳優を目指してフィレンツェに滞在。1977年にはハンブルグに戻り、フィレンツェで描き溜めていた作品をもとに個展を開催。翌年、ベルリンに移住すると、ギゼラ・キャピテンとともに「キッペンベルガーズ・ビューロ」を設立した。そこで数々の展覧会を企画するとともに、クラブの経営を行ったり、パンクバンドを結成したりしている。その後も、さまざまな場所に旅を続けながら、精力的に活動を行う。かなり特殊な制作プロセスを採り、ハイ・カルチャーとロー・カルチャーを混在させたり、既存のイメージを流用したりすることで、わざとぎこちない「バッド」なテイストの作品を作り出し、現代社会やアート・シーンのあり方を批評してきた。一見するとポストモダン的な作風は、同時代の新表現主義の動向と結びつけられて語られてきた。しかしながら、彼のあまりに多岐にわたる活動やスタイル、あるいは人を食ったような振る舞いは、このような特有の美術動向の枠組みのうちに捉えることを不可能にしている。過度の飲酒に由来すると思われる肝硬変によって、1997年、44歳で早世した。

さて「絵画の勝利」展の巻頭に掲載された論文において、ジンジャラスは、近年、西欧圏の多くの若手の画家たちがキッペンベルガーを参照していると指摘する。そうした作家たちのことを冗談まじりに、かつ、なかば揶揄するように「キッペンベルジアナ(Kippenbergiana)」と名づける。彼らのうちのいくらかは、キッペンベルガーの偶像破壊的な、

いわゆる「バッド・ペインティング」を模倣しているに過ぎないと批判する一方で、いくらかの作家たちは彼の作品をそのまま模倣することなしに、その遺産を引き継ぎながら作品を制作していると評価する。この「絵画の勝利」展は、キッペンベルガーの業績を踏まえつつ、いくつかの異なる系統樹としてピーター・ドイグ、マルレーネ・デュマス、ヨルク・インメンドルフ、リュック・タイマンズ、ヘルマン・ニッチュといった作家を召喚しつつ、現代絵画の異種混濁的な領域を把握する試みだとジンジャラスは述べている⁶⁾。

ところで、1997年にキッペンベルガーが亡くなったことを考えれば、若手作家が彼を受容した時期と、彼の活動時期とのあいだには時間差があるように思える。実際のところ、キッペンベルガーは死後しばらくのあいだ、半ば伝説的な作家であったようだ。しかし2000年代に入って少しずつその理解が進んでいった。こうした状況をジンジャラスは以下のように述べている。

美術館がついにマルティン・キッペンベルガーに追いついた。多くの若い芸術家たちもそうだ。彼の(早すぎる)死から8年が経ち、彼の遺産が美術史物語の「主流」に浸透し始めた。多くの作家がしばしば死後評価されることを考えれば、キッペンベルガーの重要性が近年広く知られるようになったことは、まったく驚くべきことではない⁷⁾。

奇しくもロンドンにおいて、キッペンベルガーの本格的な紹介は、「絵画の勝利」展の開催と同時期、2006年の初頭、テート・モダンで行われた彼の回顧展によってなされた。この展覧会で大きく取り上げられたのは、晩年のキッペンベルガーが手がけた大型インスタレーション《フランツ・カフカの『アメリカ』のハッピー・エンド》(1994年)である。1994年、ボイマンズ・ファン・ペーニンゲン美術館で開催された個展において初出品されたこの作品は、テニスコートかサッカー場かのように白く縁取られた緑色の床の上に置かれた50組のそれぞれ異なるテーブルと椅子からなる。テーブルを挟んで椅子が向かい合わせに置かれている。フランツ・カフカの未完の小説『異邦人』(『アメリカ』とも題される)の最後の方で主人公がたどりついた、サーカス団への入団面接の混乱した模様を、雑多な事物をもちいて展示空間で表現したものだという。個々の事物は既成の家具のみならず、キッペンベルガーがかつて別の展覧会で用いた残り物や、知り合いの作家の作品、そして蚤の市で入手したものが含まれている。ドリス・クリストフとジェシカ・モーガンは、テートのカタログにおいて「相互作用と蓄積によってつくられた大きなひとつの社会彫刻として作家の人生や作品を隠喩的に表しながらも、一義的な解釈に抗う」作品だと評している⁸⁾。不条理な運命に翻弄され、目的もなくアメリカの大地を西へと流浪し続けるカフカの物語の主人公に、キッペンベルガー自身の生と芸術実践が重ね合わされているのかもしれない。この展覧会において彼の作品は、視覚的なものというよりも「人間の経験の基礎としての社会システムや、コミュニケーションとして芸術を定義づける」ものとして捉えられている⁹⁾。ゆえに彼の膨大な作品群のなかから、看板描きを雇い、自分の指定する画像を描かせた《ディア・ペインター、ペイント・フォー・ミー》(1981年)や、自分の作品の複製図版をもとにアシスタントに絵画を描かせたのちに、それを写真に撮り、アシスタントの描いたものは破棄してしまう《ヘヴィー・ガイ》(1991年)といっ

た、他者に委ねる営為が作品を生み出す作品群が重視されている。

デヴィッド・ジョーズリットは、2009年、「ペインティング・ビサイド・イットセルフ」という論文において、絵画そのものではなく、絵画を生み出すネットワーク全体を重要すべきといった趣旨のキッペンベルガーの主張を引用することから自身の論を始める。そして社会的ネットワークや、文化・歴史的なネットワークを描き出すのではなく、ネットワーク間の交通を可能にする媒体となるような作品を「推移的な絵画」と定義づける。ちなみに推移的な絵画は、仮にそれを所有したとしても、その事物が所属するネットワークを所有することはできないために、コモディティとしての性格を回避することができる。あるいは商品化された芸術作品への批評として機能する。このような推移性を孕んだ作品を生み出す、キッペンベルガー以降の作家として、絵画をインスタレーションとパフォーマンスの結節点として機能させるユタ・クター、絵画が個人的、美的、批評的、歴史的な条件によって構築されたネットワークの産物であることを可視化させるスティーヴン・プリナ、一見するとミニマルな抽象絵画だが、フォトショップで描画された矩形をインクジェットプリンターで出力するウェイド・ガイトンなどを、ジョーズリットは挙げている¹⁰⁾。

2015年にミュンヘンのブランドホルスト美術館で開催された「ペインティング2.0」展は、インターネットが社会のインフラストラクチャーとして当たり前になって以降のさまざまな絵画のあり方を紹介する、20世紀後半の絵画史を振り返る展覧会であったが、この展覧会の冒頭で展示されていた作品も、やはりキッペンベルガーの《ヘヴィー・ガイ》であった。この作品が主題としているオリジナルなきコピーの流通は、たしかに現在のインターネット社会をそのまま体現しているかのように捉えることもできるだろう。時代がキッペンベルガーに追いつき、ようやく我々は彼が主張していたように作品の表れの背後にあるシステムをこそ、芸術的实践としてみなすことができるようになったのだろうか。

このように、2000年代前半から足かけ10年間にかけて、キッペンベルガーの作品において評価されてきたのは、その「バッド」な見かけや、そうした表象を作り出す絵画的技巧や方法論ではない。むしろその見た目の背後にあるシステムの作り方にあった。絵画あるいはイメージの表れは仮設的なものに過ぎず、作家はその表れをつくりながらも、その表れを可能にするシステムを提示するのだ。このとき絵画のメディウムとは、モダニズムにおける自律したものから、文字通りのメディア(媒介)として捉え直されうるだろう。

5. まとめ

「絵画の勝利」展における批評的な目的のひとつは、欧米圏における、若手作家がキッペンベルガーを受容したことによって変化したかにみえる現代絵画を取り上げることにある。とはいえ、いまこの展覧会カタログを見直してみると、特にパート3の部分に取り上げられた作家たちにおいては、絵画制作におけるコンセプチュアルな側面にどこまで自覚的であったか、疑問に思うところはある。だが確かなことは、「絵画の勝利」展には、1990年代に頂点を迎えたYBAsへの単なる保守反動的な動きではなく、キッペンベルガー

の影響を検証することによって、新しい絵画モデルを見出すという大まかな構想があった。そしてこのことが、その後の現代絵画の一潮流に批評的な視座を提供したことは間違いない。こうした批評的意義がある一方で、サーチが絵画へと関心を注いだこと自体が、絵画市場に刺激を与えたことも否めない。実際、サーチはこの展覧会のために作品を買い上げ、そして展覧会が終わると一部作品を売却したとされている。おりしもアートフェアが世界的に流行し、アートフェアには絵画などの旧来のジャンルがよく見られ、他方、ビエンナーレ、トリエンナーレなどのアートフェスティバルには、インスタレーションや社会実践的な芸術表現がよく展示されるといった、漠然とした棲み分けがあるかのようにみなされていたのもこの時期であるように思う。この点に関する検証は、次の機会に行いたい。

註

- 1) ロバート・ヒューイソン『文化資本 クリエイティブ・ブリテンの盛衰』小林真理訳、美学出版、2017年、52-54頁。
- 2) 「ピーター・ドイグとアンガス・クックの対話[抄訳] (2013年)」榎田倫広・吉村真訳『ピーター・ドイグ』展覧会カタログ、東京国立近代美術館、2020年、185頁。
- 3) 「アート・ワールドにびったり合うよう『製造された』り、リデザインされたりしているように見えるようなアートに対しては、そうとうに冷笑的であったでしょうよ。当時、そうした種類の芸術はゴールドスミス・カレッジを出て仕事をしている幾人かのアーティストに代表されているように思われました。そして、それゆえに当時からわたしの絵の多くには、それらと比べて意図的に「民衆的」で手作りの感じが備わっているのです。[1986年から89年のモントリオール居住ののち、]カナダから戻ったころのわたしの絵の多くは、そのころにロンドンで見ていた多くの芸術への反発として制作されました。」「ピーター・ドイグ——20の質問[抄訳] (2001年)」『ピーター・ドイグ』展覧会カタログ、前掲書、210頁。
- 4) たとえば、以下を参照。<https://www.tate.org.uk/art/artists/francis-bacon-682/damien-hirst-francis-bacon>。最終閲覧日：2021年12月19日。
- 5) https://www.saatchigallery.com/exhibition/triumph_painting2。最終閲覧日：2021年12月19日。
- 6) Alison M. Gingeras, “Kippenbergiana Avant-Garde Sign Value in Contemporary Painting,” *Triumph of Painting*, Saatchi Gallery, exh. cat, 2005, p. 7.
- 7) *Ibid.*, p. 6.
- 8) Doris Krystof and Jessica Morgan, “Martin Kippenberger (1953–1997),” *Martin Kippenberger*, exh. cat., Tate, 2006, p. 9.
- 9) *ibid.*, p. 10.
- 10) David Joselit, “Painting Beside Itself,” *October*, no. 130, Fall 2009, pp. 125–134; 尾崎信一郎、金井直、小西信之、近藤学編『Art Since 1900』東京書籍、2019年、810-817頁。

謝辞

本稿執筆にあたり、1988年よりロンドンに在住し、自らプレーヤーとしてロンドンのアート・シーンをつぶさに見てきた画家・近藤正勝氏から表1の展覧会史作成について助言を頂戴するとともに、当時の状況についてもご教示いただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

本論文は、科学研究費助成事業 若手研究(19K13019)「1990年代から2000代のロンドンにおける具象絵画に関する研究」の助成を受けたものである。

表1 ロンドンの主要美術館における絵画の展覧会史(一部、YBAsのグループ展を含む)(1991-2010)

| year | dates | exhibition title | venue |
|----------------------|---|--|-------------------------|
| 1991 | 1 Feb. - 24 Mar. | Michael Andrews: The Delectable Mountain | Whitechapel Art Gallery |
| | 18 Feb. - 26 July | David Hockney: Seven Paintings | Tate Gallery |
| | 1 Aug. - 1 Sept. | Broken English: Angela Bulloh, Ian Davenport, Anya Gallaccio, Damien Hirst, Gary Hume, Michael Landy, Sarah Staton, Rachel Whiteread | Serpentine Gallery |
| | 4 Oct. - 1 Dec. | Richard Diebenkorn | Whitechapel Art Gallery |
| | 30 Oct. 12 Jan. 1992 | Gerhard Richter | Tate Gallery |
| 1992 | 11 Mar.-17 May | Otto Dix, 1891-1969 | Tate Gallery |
| | 17 June - 6 Sept. | Richard Hamilton | Tate Gallery |
| | 17 Sept. - 6 Dec. | Bridget Riley: Paintings, 1982-1992 | Hayward Gallery |
| 1993 | 17 Feb. - 25 Apr. | Robert Ryman | Tate Gallery |
| | 8 Apr. - 27 June | Georgia O'Keefe: American and Modern | Hayward Gallery |
| | 8 Sept. - 24 Oct. | Agnes Martin: Paintings and Drawings 1977-1991 | Serpentine Gallery |
| | 10 Sept. - 21 Nov. | Lucian Freud | Whitechapel Art Gallery |
| | 17 Dec. - 6 Feb. 1994 | Fiona Rae | ICA |
| 1994 | 3 Mar. - 30 May | Unbound: Possibilities in Painting | Hayward Gallery |
| | 16 June - 4 Sept. | R. B. Kitaji, A Retrospective | Tate Gallery |
| | 4 Nov. - 6 Feb. 1994 | Julian Opie | Hayward Gallery |
| 1995 | 15 Feb. - 7 May | Willem de Kooning | Tate Gallery |
| | 28 Nov. 1995 - 10 Mar.1996 | Picturing Blackness in British art, 1700s-1900s | Tate Gallery |
| 1996 | 2 Apr. - 30 June | Marlene Dumas | Tate Gallery |
| | 11 May - 14 July | Chapmanworld: Dinos and Jake Chapman | ICA |
| | 17 May - 30 June | Prunella Clough | Camden Art Centre |
| | 6 June - 1 Sept. | Leon Kossoff | Tate Gallery |
| 1997 | 16 Jan. - 6 Apr. | Fiona Rae, Gary Hume | Saachi Gallery |
| | 12 June - 7 Sept. | Ellsworth Kelly: A Retrospective | Tate Gallery |
| | 18 Sept. - 28 Dec. 1997 | Sensation: Young British Artists from the Saatchi Collection | Royal Academy of Arts |
| 1998 | 10 Jan - 22 Mar. | R. B. Kitaji: an American in Europe | Tate Gallery |
| | 3 Feb. - 26 May | Per Kirkeby | Tate Gallery |
| | 5 Feb. - 5 Apr. | Francis Bacon: The Human Body | Hayward Gallery |
| | 8 March - 16 Aug. | Peter Doig | Whitechapel Art Gallery |
| | 1 Apr. - 24 May | Sarah Sze | ICA |
| | 9 Apr. - 31 May | Chris Ofili | Serpentine Gallery |
| | 3 June - 26 July | Lucian Freud: Some New Paintings | Tate Gallery |
| | 25 June - 6 Sept. | Patrick Heron | Tate Gallery |
| 4 Dec. - 7 Feb. 1999 | Rosemarie Trockel: Bodies of Work 1986-1998 | Whitechapel Art Gallery | |
| 1999 | 15 Feb. - 2 May | Francois Bacon: Working on Paper | Tate Gallery |
| | 11 Mar. - 6 June | Jackson Pollock | Tate Gallery |
| | 4 June - 11 July | The Golden Age: Graham Gafen, Neo Rauch, Johnny Spencer | ICA |
| | 18 June - 30 Aug. | Bridget Riley: Paintings from the 1960s and 70s | Serpentine Gallery |
| 2000 | 4 Feb. - 26 March | Marlene Dumas | Camden Art Centre |
| | 28 Sept. - 5 Nov. | Jim Shaw: Thrift Store Paintings | ICA |
| | 12 Oct. - 12 Dec. | Terry Frost | Royal Academy of Arts |
| | 17 Nov. - 7 Jan. 2001 | Brice Marden | Serpentine Gallery |
| | 27 Nov. - 23 Jan. 2001 | Gary Hume | Whitechapel Art Gallery |
| 2001 | 2 Feb. - 1 Apr. | Andy Warhol: Retrospective | Tate Modern |
| | 6 Apr. - 3 June | Mary Heilmann | Camden Art Centre |
| | 15 June - 27 Aug. | Malcolm Morley: In Full Colour | Hayward Gallery |
| | 19 July - 7 Oct. | Michael Andrews | Tate Britain |
| | 14 Sept. - 12 Dec. | Frank Auerbach: Paintings and Drawings 1954-2001 | Royal Academy of Arts |
| 2002 | 14 Mar. - 12 Apr. | Tilson: Pop to Present | Royal Academy of Arts |
| | 6 June - 1 Sept. | Gilbert & George: Dirty Words Pictures | Serpentine Gallery |
| | 20 Sept. - 5 Jun. 2003 | Barnett Newman | Tate Modern |
| 2003 | 12 Feb. - 5 May | Max Beckmann | Tate Modern |
| | 26 June - 28 Sept. | Bridget Riley | Tate Britain |
| | 1 Oct. 14 Mar. 2004 | Hell: Jake and Dinos Chapman | Saachi Gallery |
| | 2 Oct. - 21 Mar. 2004 | Sigmar Polke: history of everything | Tate Modern |
| | 22 Nov. - 25 Jan. 2004 | Ian Kjaer: ArtNow at Tate Britain | Tate Britain |
| | 6 Dec. - 14 Mar. 2004 | Gerhard Richter: Atlas: the reader | Serpentine Gallery |
| 2004 | 31 Jan. - 11 Apr. | Christopher Wool | Camden Art Centre |
| | 24 Mar. - 4 July | New Blood | Saachi Gallery |
| | 30 Mar. - 23 May | Raoul de Keyser | Whitechapel Art Gallery |

| | | | |
|------|------------------------|---|-------------------------|
| | 11 June – 29 Aug. | East End Academy | Whitechapel Art Gallery |
| | 23 June – 26 Sept. | Luc Tuymans | Tate Modern |
| | 25 June – 22 Aug. | Wilhelm Sasnal | Camden Art Centre |
| | 10 Sept. – 14 Nov. | Paul Noble | Whitechapel Art Gallery |
| | 24 Nov. – 6 Feb. | Francis Picabia | Camden Art Centre |
| | 3 Dec. – 6 Mar. 2005 | Faces in the Crowd: Picturing Modern Life from Manet to Today | Whitechapel Art Gallery |
| 2005 | 4 Feb. – 10 Apr. | Silke Otto-Knapp | Tate Britain |
| | 26 Jan. – 3 July | The Triumph of Painting part 1 | Saachi Gallery |
| | 10 Feb. – 17 Apr. | Africa Remix: Contemporary Art of a Continent | Hayward Gallery |
| | 7 June – 4 Sept. | Back to Black: Art, Cinema & the Racial Imaginary | Whitechapel Art Gallery |
| | 5 July – 30 Oct. | The Triumph of Painting part 2 | Saachi Gallery |
| | 4 Nov. – 2 Feb. 2006 | The Triumph of Painting part 3 | Saachi Gallery |
| | 25 Nov. – 29 Jan. | Kerry James Marshall | Camden Art Centre |
| 2006 | 8 Feb. – 14 May | Martin Kippenberger | Tate Modern |
| | 17 Feb. – 16 Apr. | Hilma af Klint | Camden Art Centre |
| | 14 June – 17 Sept. | Howard Hodgkin | Tate Britain |
| | 7 July – 2 Sept. | Albert Oehlen: I will Always Champion Good Painting - I will Always Champion Bad Painting | Whitechapel Art Gallery |
| | 29 Sept. – 26 Nov. | Laura Owens | Camden Art Centre |
| | 7 Oct. – 17 Dec. | Raqib Shaw | Tate Britain |
| 2007 | 24 Mar. – 27 Aug. | Prunella Clough | Tate Britain |
| | 12 July – 16 Sept. | Marta Marcé | Camden Art Centre |
| | 22 Sept. – 9 Dec. | Georg Baselitz | Royal Academy of Arts |
| | 28 Sept. – 25 Nov. | Mamma Andersson | Camden Art Centre |
| | 4 Oct. – 30 Dec. | The Painting of Modern Life | Hayward Gallery |
| 2008 | 5 Feb. – 27 Apr. | Peter Doig | Tate Britain |
| | 13 Feb. – 4 May | Modern Painters: the Comden Town Group | Tate Britain |
| | 22 Feb. – 20 April | Thomas Scheibitz | Camden Art Centre |
| | 2 May – 29 June | Tal R | Camden Art Centre |
| | 19 June – 14 Sept. | Cy Twombly: Cycles and Seasons | Tate Modern |
| | 11 Sept. – 4 Jan. 2009 | Francis Bacon | Tate Britain |
| | 23 Sept. – 16 Nov. | Gerhard Richter: 4900 Colours | Serpentine Gallery |
| | 26 Sept. – 1 Feb. 2009 | Rothko: the Late Series | Tate Modern |
| 2009 | 3 Feb. – 19 Apr. | Hurvin Anderson: Peter's Series 2007–2009 | Tate Britain |
| | 17 June – 6 Sept. | Per Kirkby | Tate Modern |
| | 14 Oct. – 10 Jan. 2010 | Ed Ruscha: Fifty Years of Painting | Hayward Gallery |
| 2010 | 27 Jan. – 16 May | Chris Ofili | Tate Britain |
| | 22 Sept. – 28 Nov. | René Daniëls | Camden Art Centre |

* 調査対象の美術館は以下の通り。テート・ギャラリー(2000年以降は、テート・ブリテンとテート・モダンに分かれる)、王立芸術院、 Hayward Gallery、ホワイトチャペル・アート・ギャラリー、サーペンタイン・ギャラリー、ICA、カムデン・アート・センター、サーチ・ギャラリー

表2 『トライアンフ・オブ・ペインティング展』(2005年)のカタログに収録された作家一覧

| 作家名 | 生年、生誕地 | 活動拠点 |
|------------------------|--------------------------------|-----------------|
| 第一期(2005年1月26日～7月3日) | | |
| マルティン・キッペンベルガー | 1953年、ドルトムント、ドイツ、1997年、ウィーンで死去 | |
| ピーター・ドイツ | 1959年、スコットランド | トリニダード |
| マルレーネ・デュマス | 1953年、ケープタウン、南アフリカ | アムステルダム |
| リュック・タイマンス | 1958年、ベルギー | アントワープ |
| ヨルク・インメンドルフ | 1945年、ブレッケーデ、ドイツ | デュッセルドルフ |
| ヘルマン・ニツチュ | 1938年、ウィーン | ウィーン |
| 第二期(2005年7月5日～10月30日) | | |
| ダニエル・リヒター | 1962年、ドイツ | ベルリンおよびハンブルグ |
| カイ・アルトフ | 1966年、ケルン、ドイツ | ケルン |
| セシリー・ブラウン | 1969年、ロンドン | ニューヨーク |
| デクスター・ダルウッド | 1960年、ブリストル、イギリス | ロンドン |
| マイケル・レデッカー | 1963年、アムステルダム | ロンドン |
| マルクス・ムンテアン&アディ・ローゼンブラム | "1962年、グラーツ、オーストリア | |
| 1962年、ハイファ、イスラエル" | ロンドンおよびウィーン | |
| タルR | 1967年、イスラエル | コペンハーゲン |
| ヨナタン・メーゼ | 1971年、東京 | ベルリン |
| アルベルト・オーレン | 1954年、クレーフエルト、ドイツ | ケルン |
| ダナ・シュツツ | 1976年、リヴォニア、アメリカ合衆国 | ニューヨーク |
| フランツ・アッカーマン | 1963年、ノイマルクト＝ザンクト・ファイト、ドイツ | ベルリン |
| トーマス・シャイピッツ | 1968年、ラーデベルク、ドイツ | ベルリン |
| ヴィルヘルム・サスナル | 1972年、タルヌフ、ポーランド | タルヌフ |
| 第三期(11月4日～2006年2月5日) | | |
| ディー・フェリス | 1973年、サマーセット、イングランド | ロンドン |
| マイケ・シュレル | 1973年、ベルセン、ドイツ | ロンドン |
| サラ・ビックストーン | 1965年、マンチェスター、イングランド | ロンドン |
| トラルフ・ノプロッホ | 1962年、パウツェン、ドイツ | ドレスデン |
| マイク・シルヴァ | 1970年、サンドビーケン、スウェーデン | ロンドン |
| マイケル・アシュクロフト | 1974年、ランカシャー、イングランド | ロンドン |
| クリストフ・リックヘパーレ | 1972年、プファッフェンホーフエン、ドイツ | ライプツィヒ、ドイツ |
| クリスティアン・ワード | 1971年、野田、日本 | ロンドン |
| ティム・ストナー | 1970年、エセックス、イングランド | ロンドン |
| エンリコ・デヴィッド | 1966年、アンコナ、イタリア | ロンドン |
| シャンタル・ジョッフエ | 1969年、セント・オーバンス、イングランド | ロンドン |
| ソフィー・フォン・ヘラーマン | 1975年、ミュンヘン、ドイツ | ロンドン |
| リズ・ニール | 1973年、ウェールズ | ロンドン |
| ティム・ロキエック | 1977年、クリーヴランド、アメリカ合衆国 | ニューヨーク |
| ジン・メイヤーソン | 1972年、仁川、韓国 | ニューヨーク |
| アンドリュー・グエンサー | 1976年、ウィートン、アメリカ合衆国 | ニューヨーク |
| エナ・スウォンジー | 1966年、ノース・カロライナ、アメリカ合衆国 | ニューヨーク |
| マウロ・ボナチナ | 1977年、ミラノ、イタリア | ロンドン |
| ティロ・バウムゲルテル | 1972年、ドレスデン、ドイツ | ライプツィヒ、ドイツ |
| ルーシー・スケア | 1975年、ケンブリッジ、イングランド | グラスゴー、スコットランド |
| ジョン・コルネル | 1967年、オーフス、デンマーク | コペンハーゲン |
| イアン・モンロー | 1973年、ニューヨーク | ロンドン |
| ステファン・キュルテン | 1963年、デュッセルドルフ、ドイツ | デュッセルドルフ |
| ウィレム・ワイズマン | 1977年、アイントホーフエン、オランダ | ロンドン |
| ヘルナン・パス | 1978年、マイアミ、アメリカ合衆国 | フロリダ、アメリカ合衆国 |
| ルーシー・マッケンジー | 1977年、グラスゴー、スコットランド | グラスゴー |
| ダヴィッド・ソープ | 1972年、グリニッジ、イギリス | ロンドン |
| トビー・ジーグラ | 1972年、イングランド | ロンドン |
| マルタ・マルセ | 1972年、ヴィラフランカ、スペイン | ロンドン |
| エヴレン・テキノクタイ | 1972年、コペンハーゲン、デンマーク | コペンハーゲン |
| サイモン・ベッドウェル | 1963年、クロイドン、イギリス | ロンドン |
| ヨハネス・ヴォンサイファー | 1967年、ケルン、ドイツ | ケルン |
| エベルハルト・ハーフェコスト | 1967年、ドレスデン、ドイツ | ドレスデンおよびベルリン |
| アリサ・マルゴリス | 1975年、キエフ、ウクライナ | ドレスデンおよびベルリン |
| 杉戸洋 | 1970年、名古屋 | 名古屋 |
| バーナビー・ファーマス | 1973年、フィラデルフィア、アメリカ合衆国 | ニューヨーク |
| マリオ・ロッジ | 1958年、グラスゴー、スコットランド | ロンドンおよびヘイスティングス |

*作家の在住地は、カタログ情報にもとづく

A History of Figurative Painting Exhibitions in 1990s and 2000s London: Focus on *The Triumph of Painting*

Masuda Tomohiro

This paper surveys the history of painting exhibitions held at major museums in London from 1991 to 2010, and attempts to examine the relevant trends.

In the 1990s the so-called YBAs (Young British Artists), primarily young graduates of Goldsmiths College such as Damien Hirst, were at the forefront of British contemporary art. Their high-impact installations and shrewd strategies earned them acclaim not only in the UK but around the world. Meanwhile, the 1990s also saw the emergence of new trends in figurative painting, exemplified by artists such as Peter Doig. From the late 1990s to the late 2000s, there was a steady stream of painting exhibitions at medium- and large-scale museums.

This paper focuses in particular on the exhibition *The Triumph of Painting* at Saatchi Gallery in 2005. Saatchi Gallery is a venue founded by Charles Saatchi, the founder of advertising agency Saatchi & Saatchi and renowned art collector. In the 1990s, Saatchi furthered the careers of the YBAs by purchasing their works and presenting them in this gallery. With *Triumph of Painting*, it seemed that Saatchi intended to change directions, and the exhibition elicited a significant response. Held over three terms, it included the works of mid-career painters already highly renowned in Europe and the United States, as well as younger painters. The only featured artist no longer living was the German painter Martin Kippenberger, and the preface to the exhibition catalogue emphasized his influence on young artists. For this reason, this paper summarizes the responses to Kippenberger since 2005, and examines the types of paintings reflecting Kippenberger's influence that have emerged and received critical evaluation during that time.